

存在と時間 3 <全8巻>

第1部 時間性に基づいた現存在の解釈と、存在への問いの超越論的な地平としての時間の解明

第1篇 現存在の予備的な基礎分析

第3章 世界の世界性

第17節 指示とめじるし

- 221 指示と指示全体性
- 222 <めじるし>
- 223 <めじるし>の性格
- 225 <めじるし>の分析
- 226 自動車の方向指示器の実例
- 227 表示としての指示と有用性としての指示
- 228 <道具の経験>の条件
- 229 <めじるし>の役割と分類
- 230 <めじるし>を定めること
- 231 <めじるし>の発見
- 232 手元的な存在者の道具性格
- 233 ハンカチの結び目の実例
- 234 未開社会の実例
- 235 <めじるし>と指示の三重の関係

第18節 適材適所性と有意義性、世界の世界性

- 236 世界の世界性への問い
- 237 適材適所性
- 238 適材適所性と目的としての現存在
- 239 適材適所をえさせること

- 240 アプリオリに完了した状態
- 241 「露呈されていること」という語の問題点
- 242 世界内存在の理解
- 243 世界の世界性
- 244 <世界との親しみ>
- 245 新たな課題
- 246 「意義を示す働き」と現存在
- 247 言語の条件
- 248 有意義性の意味
- 249 二つの疑問
- 250 三つの存在様式と関数概念
- 251 好ましくない事例

B 世界性の分析とデカルトによる世界の解釈の対比

- 252 デカルトの世界の解釈の欠陥
- 253 デカルトの「世界」の存在論の解釈の構成

第19節 広がりのあるもの {レス・エクステンサ} としての「世界」の規定

- 254 実体概念の二重性
- 255 物的なものの存在論的な規定——広がり
- 256 物体の多様な様態
- 257 実体の実体性としての広がり

第20節 「世界」の存在論的な規定の基礎

- 258 二種類の実体
- 259 実体の存在の意味
- 261 問題解決のために必要なもの

■ 第21節 「世界」についてのデカルトの存在論の解釈学的な考察

- 262 デカルトの存在論の問題点
- 263 デカルトと自然科学的な認識
- 264 ノエインの優位とアイステーシスへの批判
- 265 感覚能力の限界と〈広がり〉
- 266 デカルトの欠陥
- 267 固さと抵抗を経験するための条件
- 268 デカルトの存在理念
- 269 現存在を実体と捉えることの意味
- 270 デカルト批判への異論
- 271 これまでの解明で証明したこと
- 272 デカルト批判への新たな異論
- 273 「価値」概念を利用する方法の挫折
- 274 「補足」の方法とデカルトの方法の共通性
- 275 今後の課題
- 276 今後の分析の具体的な内容
- 277 第一の課題
- 278 第二の課題
- 279 第三の課題
- 280 第四の課題
- 281 分析の成果
- 282 伝統的な方法の欠陥
- 283 デカルトの分析の「救出」

C 環境世界の〈まわり性〉と現存在の「空間性」

- 284 分析の構成

■ 第22節 世界内部的な手元存在者の空間性

- 285 分析の課題
- 286 道具の属すべき場所
- 287 〈辺り〉と〈身のまわり〉
- 288 〈辺り〉の実例としての住宅
- 289 〈辺り〉と空間性

■ 第23節 世界内存在の空間性

- 290 現存在の空間性とは
- 291 実存カテゴリーとしての〈距離を取る〉こと
- 292 近さへの本質的な傾向
- 293 客観的な間隔と〈距離を取る〉ことの違い
- 294 主観性の意味
- 295 「ごく身近にある」ことの両義性
- 296 〈ここ〉と〈あそこ〉
- 297 現存在の空間性
- 298 〈アウスリヒトツング方向づけ〉とリヒトツング方向
- 299 左右の方向づけ
- 300 方向づけと世界内存在
- 301 暗い部屋の実例とカント批判
- 302 これまでの解明の役割

■ 第24節 現存在の空間性と空間

- 303 現存在の空間性の総括
- 304 世界の世界性で開示される空間の特徴
- 305 道具のもつ空間性
- 306 空間のアプリオリ性——カント批判
- 307 空間の「露呈」
- 308 自然の世界の登場
- 309 空間の存在様式への疑問
- 310 空間の存在論の課題
- 311 世界と空間

■ 第4章 共同存在と自己存在としての世界内存在、^{ひと}世人

- 312 本章の構成

■ 第25節 現存在とは〈誰なのか〉を問う実存論的な問いの端緒

- 313 自己という基体
- 314 現存在の〈誰〉
- 315 問題構成の転倒を避けるべきこと
- 316 意識の形式的な現象学
- 317 現存在の自己解釈の罨
- 318 他者との共同現存在の存在論的な解釈
- 319 自明性のもたらす誘惑
- 320 導きの糸
- 321 人間の実体

■ 第26節 他者の共同現存在と日常的な共同存在

- 322 回答の手掛かり
- 323 現存在としての他者
- 324 他者とは誰のことか
- 325 他者との出会いかた
- 326 〈ここにいるこのわたし〉
- 327 〈ここ〉と〈あそこ〉
- 328 他者との出会いの意味
- 329 孤独と共同存在
- 330 顧慮的な気遣い
- 331 顧慮的な気遣いの欠如態
- 332 他者の代理になる顧慮的な気遣い
- 333 他者に手本を示す顧慮的な気遣い
- 334 共同相互存在の対極的なありかた
- 335 共同相互存在のさまざまな混合形態
- 336 気配りのまなざしと大目に見るまなざし
- 337 〈そのための目的〉としての現存在
- 338 他者のために存在する現存在
- 339 他者と知り合うこと
- 340 たがいにもまず近づきになること
- 341 「感情移入」
- 342 自己の複製としての他者
- 343 「感情移入」論の弱点
- 344 「感情移入」と共同存在
- 345 「感情移入」の解釈学の課題
- 346 共同相互存在をひきうける者

■ 第27節 日常的な自己存在と世人^{ひと}

- 347 「主体としての性格」
- 348 他者との疎遠さ
- 349 世人^{ひと}
- 350 世人^{ひと}の独裁
- 351 存在可能性の平均性
- 352 公共性
- 353 世人^{ひと}の責任
- 354 存在免責
- 355 誰でもないひと
- 356 「不断性」
- 357 「もっとも実在的な主体」
- 358 伝統的な論理学の無能
- 359 実存カテゴリーとしての世人
- 360 世界の隠蔽と露呈
- 361 現存在の根本的な機構
- 362 存在論的な解釈の失敗の根源
- 363 本来的な自己存在のありかた
- 364 自己の自同性

●MEMO